

第5章 計画条件の整理

公園計画の主要な条件である歴史的風致・土地利用・施設利用について、歴史的状況や資料・情報の有無、利用方策などの観点から検討整理を行った。なお、摘要欄に記入した特A、A、B、Cは、各要素を総合的に判断し、整備水準や優先度、重要度の目安となるようなランク付けを試みたものである。

1. 歴史的風致の整理

基本計画に先立ち、歴史的風致を構成する要素を抽出し、首里城を城外から遠望した景観、首里城に近づき城内へ入っていくアプローチ景観、首里城内から城外を望む景観を分析し、歴史的風致の整理を行った。

1) 歴史的風致構成要素の把握

往時の歴史的風致を写真、古地図、絵図、地形図な

どの資料から判断し、歴史的風致を大きく構成している要素として以下の項目で区分した。

- (1)城郭（地形・城壁）
- (2)建造物（門、道、^{とうどう}礎道、石彫刻等）
- (3)建築物・広場
- (4)御嶽
- (5)植栽

(1)城郭（地形・城壁）

首里城の城郭は、自然の地形を巧みに利用した構造となっており、地形と城郭が一体となり変化に富んだ特徴ある風致を形成していた。さらにこの城郭からは城内外を見渡すことができた。しかし、戦災や琉球大学の建設によって地形は大きく改変され、城郭も破壊された。往時の城郭の回復について、その可能性を各観点から検討整理した。

区 域	創 建 年	特 色	参 考 史 料 又 は 現 状	摘 要	
西城郭周辺	・内郭は第一尚氏王統～尚真王時代	・西のアザナや歓会門、久慶門周辺の城壁は龍潭を掘った土で造成し構築したといわれ、また瑞泉門や漏刻門周辺は変化に富んだ地形を巧みに生かした構造となっている。 ・西のアザナ周辺は考古学的に貴重な埋蔵物が出土した地点である。 ・西のアザナは城壁上の最高所にあつてここに旗を立て、また鐘を備えて時刻を報じたという。	・歓会門から久慶門にかけての城壁は復元され、往時の景観を呈しているが、西アザナや瑞泉門、漏刻門周辺は疏大建設によって地形の大幅な改変がみられる。 ・絵図、写真あり。	・隆起石灰岩の自然地形を巧みに生かし、また往時の土木技術の粋を集めた城郭景観は最も優れている。	A
京の内	・第一尚氏王統～尚清王時代	・“京の内”と呼ばれた区域は首里城発祥の地といわれ、5つの御嶽のあった聖域である。南東の城壁に物見があった。	・東南側の中心部は比較的自然地形が保たれているが、北側や西側は疏大建設によってかなり地形が改変している。 ・絵図・写真あり。	・首里城ゆかりの地として、隆起石灰岩特有の自然地形の景観は優れており、また城壁に築造された物見からは展望が開け眺望地点に適している。	A
東城郭周辺	・内郭は第一尚氏王統時代、外郭は尚真王～尚清王時代	・内郭の“東アザナ”は場内で最も高い位置にあり、旗を立て鐘を備えて時刻を報じたという。外郭は細くなった首里台地の尾根を万里の長城の如く構築されている。	・東のアザナ周辺には、那覇市の配水タンクが設置されており、若干地形が改変している。 ・外郭南側は疏大建設に伴い、若干の切土と大規模な埋土がなされている。 ・絵図、写真あり。	・東のアザナは眺望地点に適しており、内郭と外郭が一体となって特色ある城郭景観を呈している。	A
北城郭周辺	・内郭は第一尚氏王統時代、外郭は尚真王時代	・外郭は斜面の中腹に築造され円覚寺松尾を昇っていく様に連なっていた。 ・内郭は段状の隆起石灰岩を包み込む様に造られ、歓会門から右掖門にかけてはゆるやかな石畳道が続いていた。	・外郭両側は遺構が確認されるが東側は疏大建設によって大規模な造成がなされている。 ・内郭東側は比較的自然地形が保たれているが、西側には疏大建設に伴う地形の変容がみられる。 ・絵図、写真あり。	・城外北方からは上下二段に連なった雄大な城郭が遠望できる。 ・内郭の石組と石畳道は特色あるアプローチ景観を呈している。	B
南城郭周辺	・内郭は第一尚氏王統時代、外郭は尚清王時代	・内郭は段状の隆起石灰岩台地上に築造されており、二階殿前には物見台が造られている。	・内郭西側では石積みを確認できるが、東側的美福門周辺は地形が改変されている。 ・外郭周辺はかなり原地形が残されている。 ・絵図、写真あり。	・城外南方から遠望景観はすぐれており、また美福門周辺は主要アプローチとして景観の創出が必要とされている。 ・二階殿物見からは南部一帯の展望が開け眺望地点に適している。	B

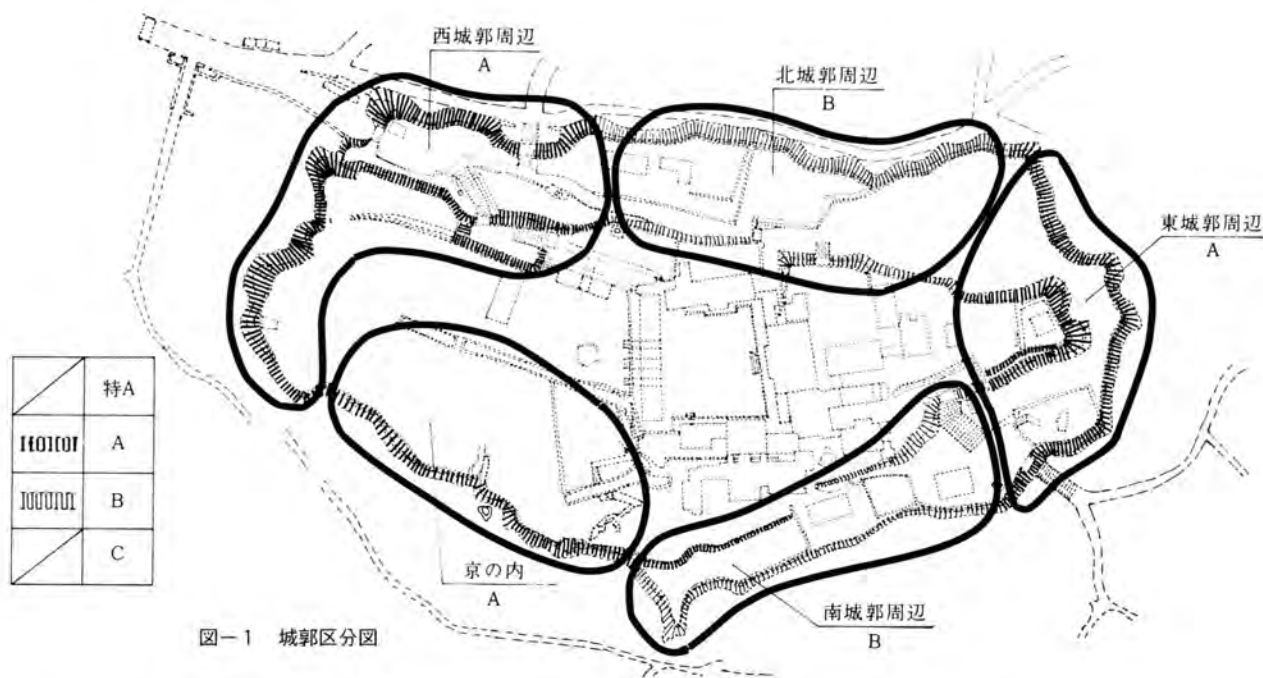


図-1 城郭区分図

(2) 建造物 (門、道、障道、石彫刻等)

首里城内には城郭と一体となって整備されていた門や石碑、石獅子、井戸、湧水、道 (石畳、磚)、障道など、その景観の風致を構成する要素として建造物が

多く点在していた。建造物の中には旧国宝に指定された歓会門、瑞泉門、白銀門など文化的価値の高いものもあり、これらに対して各観点から整理検討を行った。

名称	創建年	特色	参考史料又は現状	摘要
歓会門 石獅子一對	・尚真王時代	・首里城第一門で石造単拱門に櫓門を乗せた形成で、昭和8年旧国宝に指定された。	・戦禍により消失したが、昭和48年復元、石獅子は未整備。写真あり。	・首里城大手門として風格のある景観は優れている。 A
瑞泉門 障道 石獅子一對 龍樋 石碑七基 石畳	・第一尚氏王統～第二尚氏王統初期 ・龍樋の龍頭は1523年に中国から持ち帰ったもの	・首里城の第二門で、城壁に桁を渡し櫓門を乗せた様式で、昭和8年に旧国宝指定された。 ・龍樋は国王専用の清泉で、冊封使の飲料水にも供された。 ・石碑には冊封使の詠んだ文字が刻まれていた。	・戦禍により消失したが、平面図や写真あり。 ・龍樋及び石碑の一部は保存されている。 ・石碑はすべて拓本にとられている。	・大手城門からの主要アプローチ景観として優れている。 A
漏刻門 障道 石畳 日影台	・第一尚氏王統時代	・首里城の第三門で、城壁に桁を渡し櫓門を乗せた様式、時刻を測る機器が置かれていた。 ・日影台は石碑の台に文字を刻み、太陽によって時刻を測った日時計。	・戦禍により消失したが、平面図や写真あり。 ・日影台に刻まれた文字資料あり。	A (日影台B)
広福門	・創建年不明	・首里城第四門で、三間三面の楼門に大与座、寺社座があった。	・明治44年小学校校舎建設時に取り壊されたが、平面図や絵図、写真あり。	A
奉神門 磚瓦道	・創建年不明 ・石欄干1562年創建	・正殿の門で3つの入口を持つ七間四面の楼門で中央が高く左右に納殿、君誇がおかれていた。 ・門口と対応して3つの階段があり基壇と共に石欄干が取り付けられていた。	・明治44年に小学校校舎建設時に取り壊されたが、絵図や欄干の写真あり。 ・「君誇之欄干之記」	・大手城門からの主要アプローチであり城内結構部の景観として優れている。 A

名称	創建年	特色	参考史料又は現状	摘要	
白銀門 石畳	・創建年不明 (尚真王時代と 思われる。)	・歴代国王を奉祀する寝廟殿の門で 総石造り拱門形成の屋根を持つ様 式で、国王だけが通ることができ、 昭和8年旧国宝に指定された。	・戦禍により消失したが、平面図 や写真あり。	・石造建築物として優れている。	B
木曳門	・創建年不明	・城内工事の時、資材の搬入口とし て利用され、普段は石で封じられ ていた。	・戦禍により消失し、現在城内へ のアプローチ道路が布設されて いる。	・主要アプローチ、園路・管理園 路としての活用可能。	B
左掖門 美物板門	・創建年不明	・左掖門は美福門西側にあったとい われるが、詳細については不明。 ・美物板門は二階殿への門で、城内 唯一の木造瓦葺屋根門(ヤ ジョー)であった。	・左掖門は明治の頃に消失し、資 料等なし。 ・美物板門は戦禍により消失した が、写真あり。	・歴史的風致の形成上、関連性に 乏しい。	C
久慶門 礎道 石畳 寒水樋川	・尚真王時代	・北側からのアプローチ門で、単層 拱門に櫓門を乗せた様式で、女官 の通用門として使用された。 ・寒水川樋川は久慶門内側にある石 積みの湧泉で、城内の日常用水と して使用された。	・戦禍により消失したが、昭和58 年復元。 ・寒水川樋川、石畳等、現在整備 中。	・主要アプローチの景観として優 れている。	A
右掖門 石畳	・創建年不明	・寒水川樋川より東に長く延びた石 畳の坂道の上にあり、城壁に桁を 渡し、櫓門を乗せた様式で、御内 原への通用門として使用された。	・明治の頃に消失したと思われ るが、写真あり。	・主要アプローチの景観として 必要がある。	B
淑順門 階段 石畳	・第一尚氏王統時 代	・御内原への通用門で、桁を渡し櫓 門を乗せた様式である。	・明治の頃に消失したと思われ るが、写真あり。		B
継世門 礎道 石碑二基	・尚清王時代	・南側からのアプローチ門で、石造 単拱門に櫓門を乗せた様式で通用 門に供されていた。 ・石碑には「添継御門北之碑文」「同 南之碑文」で南側外郭や京の内を 整備した記録が刻まれていた。	・戦禍により、消失したが、写真 あり。 ・碑文は刻文字資料あり。	・東城郭からのアプローチ景観と して優れている。	A (碑文 B)
美福門 石畳	・第一尚氏王統時 代	・東側の内郭にある門で、城壁に桁 を渡し、櫓門を乗せた様式で、御 内原の通用門に使用されていた。	・明治の頃に消失しており、写真 等の資料はない。	・主要アプローチの景観として必 要である。	B

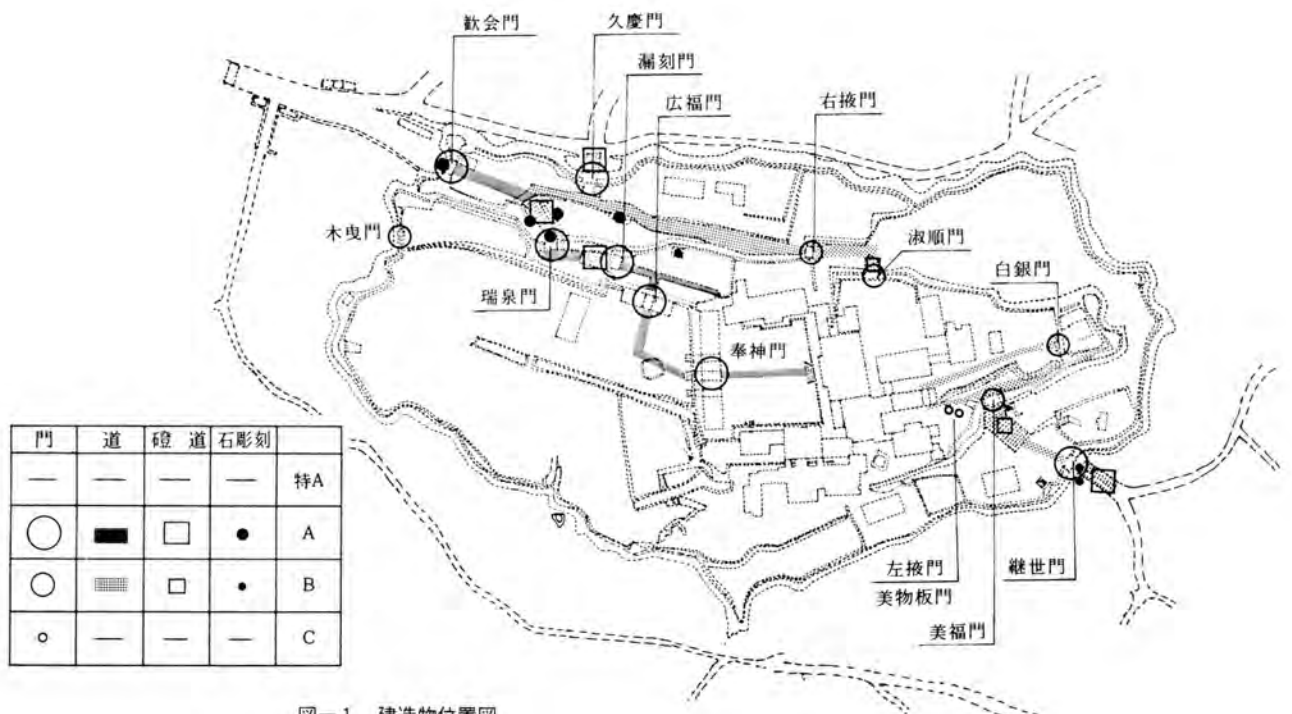


図-1 建造物位置図

(3)建築物・広場

往時の首里城内には、建物群が地形を巧みに生かして優れた風致を形成していた。その中でも御庭と、そこを取り囲む建物群によって形成されていた中心部

は、城の中核空間としての機能と威厳を備えていた。首里城の中核として特徴ある風致の回復の可能性について、各観点から検討整理した。

名称	創建年	特色	参考史料又は現状	摘要	
正殿	・創建年不明	・沖縄最大の木造建築で、外観2層、内部3層、本瓦入母屋造り、向拝唐破風付きの和・琉・中の折中様式で首里城の代表的な建物。大正14年旧国宝に指定された。	・設計図、絵図、写真等あり。	・城郭の中心結構部の最もすぐれた景観構成要素であり、世持橋や歓会門城壁、芸大グランド、三箇の町等の城内外からの眺望が最も優れている。	特A
北殿	・尚真王時代	・木造平屋建て本瓦入母屋造りで、丸柱は中国風に朱塗りされていたといわれる。	・戦禍によって消失したが、平面図や写真あり。	・世持橋や歓会門城壁等から眺望され、また中心結構部の景観を構成する要素として優れている。	A
南殿・番所	・南殿は尚豊王時代 ・番所は創建年不明	・南殿は木造二階建て本瓦葺きで、和風の建築様式。番所は木造平屋建て本瓦葺きで、南殿以上に和風の建築様式をしており、両施設は廊下によって結ばれていた。	・戦禍によって消失したが、平面図や写真あり。	・歓会門城壁から眺望され、また中心結構部の景観を構成する要素として優れている。	A
書院 鎖之間	・いずれも創建年不明	・書院、鎖之間とも木造平屋建て本瓦葺きで、廊下によって南殿と連結されている。南の庭園に開かれた建築様式となっている。	・戦禍によって消失したが、平面図や写真あり。	・結構部を構成する建物であり、また西のアザナや南外郭の物見等から眺望される景観として必要である。	B
二階殿	・尚温王時代	・城内主要建物としては最も新しく、国王の居間であり、木造二階建て本瓦葺きで、一般の住宅建築の様式となっている。また、北面は二階だが南面は地形的要因から二階に当る部分が一階になっている。	・戦禍によって消失したが、平面図や写真あり。	・結構部を構成する建物であり、また東のアザナや城外赤田町方面から眺望される景観として必要である。	B
黄金御殿 近習詰所 廊下	・いずれも創建年不明	・両建物とも木造二階建て本瓦葺きで、黄金御殿の二階は国王の居間で正殿と連結されており、一階には御庭から美福門に抜ける通路があった。	・昭和初期頃消失したが、写真あり。	・中心結構部を構成する建物として優れている。	B
世誇殿 世添殿 寄満 女官居室 金蔵 寝廟殿	・世添殿、寝廟殿ともに1753年に創建、他は不明	・いずれも御内原に建てられた建物で、詳細については不明	・明治中期から昭和初期にかけて消失しており、配置図があるだけで他に資料等がない。	・正殿の東側にあつて結構の一部を構成しているが、景観形成上とりわけ重要ではない。	C
系図座・用物座	・創建年不明	・下之御庭に建てられた建物で詳細については不明	・明治中期に消失しており、配置図があるだけで他に資料等がない。	・下之御庭と呼ばれる城内結構部の景観を構成する建物である。	B
奉行詰所	・創建年不明	・南殿の背後にあった建物で、詳細については不明	・明治中期まではあったが、昭和初期には消失しており、配置図に記載されているだけで、他に資料等はない。	・城内結構を構成している建物であり、景観構成要素としても必要と思われる。	C
係員詰所 銭蔵 料理座 大台所	・創建年不明 ・ // ・ // ・ //	・いずれも外郭付近に建てられた施設だが、詳細については不明	・明治中期まではあったが、昭和初期には消失しており、配置図に記載されているだけで、他に資料等はない。	・結構部以外の施設であり、景観形成上とりわけ重要ではない。	C
御庭	—	・正殿、北殿、南殿・番所、奉神門等で囲まれた空間で、紫禁城の太和殿の広場を模したと云われている。 ・奉神門中央から正殿階段まで磚瓦敷の“浮道”が通っていた。	・絵図、写真あり。	・正殿をはじめとする建築群を一望できる広場であり、かつて政治的セレモニーや儀式が行なわれた所で、さまざまなイベントの開催に供される。	特A
下之御庭	—	・御庭に対する前広場であり、広福門より奉神門へ至る広場であった。	・絵図、写真あり。	・城内主要施設への入口広場であり、多様な集会広場にもできる。	A
後庭	—	・正殿背後の御内原内の施設群によって囲まれた男子禁制のエリアであったが、詳細については不明。	・絵図、写真あり。	・往時の御内原の様子を偲ばせる展示広場にも利用できる。	B

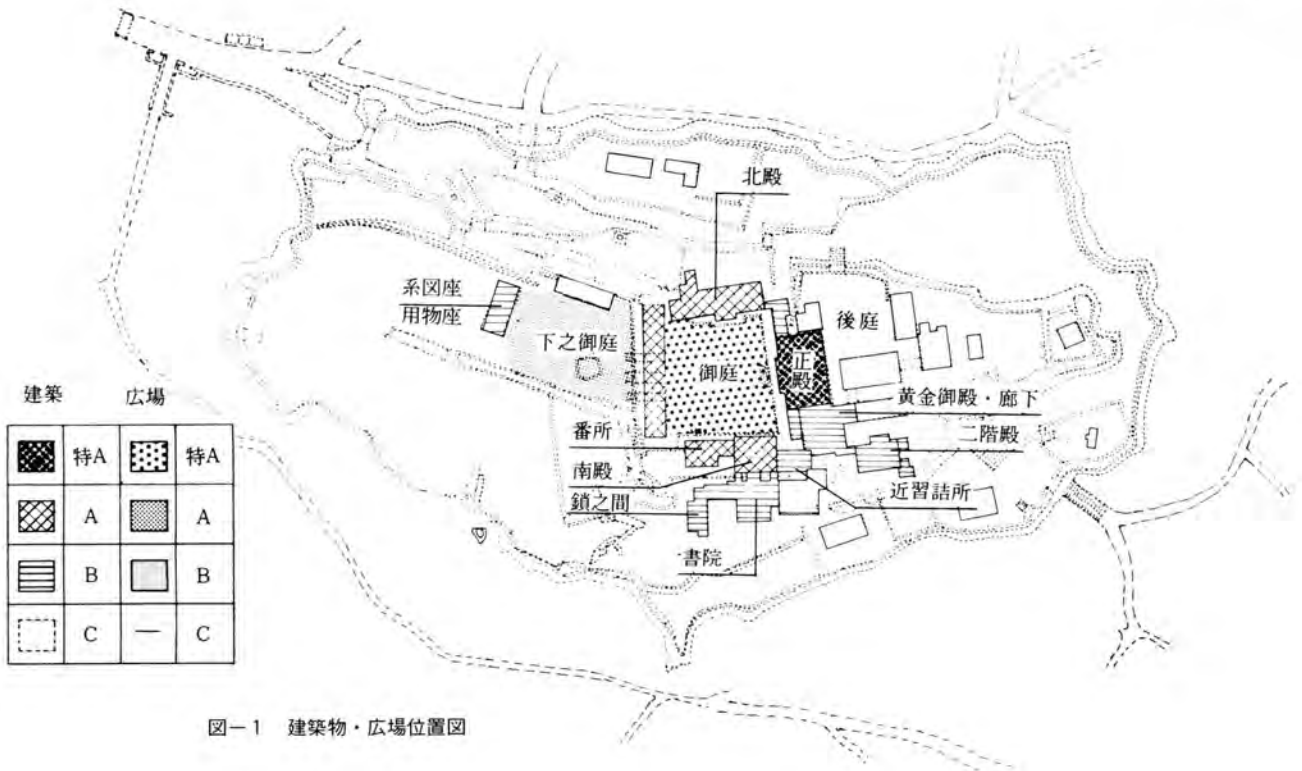


図-1 建築物・広場位置図

(4) 御嶽

古琉球における支配者の居城としての“グスク”には、御嶽や拜所のあることがよく知られている。首里城においても、当初は首里森・真玉森を始め、「京の内」と呼ばれる聖なる場所を中心に小規模な“グスク”が形成されたとと思われる。

『琉球国由来記』（1713年）や『女官御双紙』（1706

～13年）、『おもろさうし』（1531～1623年）によると、城内には9ないし10の御嶽があったと記されている。

首里森・真玉森の御嶽のあった聖域は沖繩の開闢二神降臨の地として、かつて王朝の最高神女（聞得大君）による荘厳な祭祀が行われた所である。ここは首里城を特徴づける重要な場所であり、本計画では首里城成立の由緒ある場所として位置づける。

場所	名称	神名	位置	摘要
京の内	キヤウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ（首里森）		絵図によると「奉神門」西側に位置しているが、明治12年頃「京の内」に移設されたという。	「琉球国由来記」、絵図、地形変容
	キヤウノ内ノ御嶽	シキヤヂシキヤダケノ御イベ	「京の内」西側に3つの御嶽があるが、位置の確認ができない。	「琉球国由来記」、絵図、地形変容
	キヤウノ内ノ御嶽	ソノイタジキノ御イベ	〃	〃
	キヤウノ内ノ御嶽	アガルイノ大御イベ	〃	〃
	真玉城ノ御嶽	玉ノミヤノ御イベ	「京の内」西側城壁沿いにあると云われている。	「琉球国由来記」、象徴的な岩場、洞穴あり
その他	御内原ノマモノ内ノ御嶽	ウチアガリノ御イベ	「奉行詰所」南側と云われている。	「琉球国由来記」、象徴する岩場あり
	ミモノ内御嶽	カワルメノ御イベ	「二階殿」西側	「琉球国由来記」、絵図、象徴する岩場あり
	寄内ノ御嶽	カミチャナミヤデラノ御イベ	「料理座」西側と云われている。	「琉球国由来記」、絵図、地形変容
	アカタ御チャウノ御嶽	アガルタケ押明森ノ御イベ	「美福門」南側	「琉球国由来記」、絵図、石積残存
	寄内ノミヤカモリノ御イベ		不明	「女官御双紙」

(5)植 生

首里城跡には、戦禍や戦後の地形改変によってかつての樹林地はなく、琉球大学当時の植栽が残存してい

る。植栽は、歴史的風致の回復、景観構成の上で重要であり、往時の植生の回復の可能性について各視点から検討整理した。

区 域	特 色	現 況	摘 要	
東のアザナ南東側	・東側は風衝植生の傾向を示す低木が群生 ・南側は御嶽を含む崖地の樹林地	・造成地及び建物敷地となり樹林はほとんど見られない。	・首里城外縁部をとり巻く緑で、城外からみる首里城の景観を構成する主要な要素となる。	B
東のアザナ周辺	・石灰岩植生が御嶽の森として守られている(オオバキ、リュウキュウガキ等の植生がみられる)	・造成が行われ樹林はほとんど見られない	・御嶽の森であり、史実にもとづく緑の再生が必要とされる。	B
東のアザナ北側	・石灰岩植生の高木類が繁り、首里城を囲む森を形成していた。	・崖面近くにクワ科植物を中心とした自然植生が僅かに見られる	・城外から眺望される緑の景観として位置づけられる。	C
淑 順 門 前	・ソテツの植生が絵図にみられる。	・草地	・主要アプローチに対応する植栽による演出が必要とされる。	A
右掖門北側	・アコウの大木やハマイヌビワ等が斜路と一体となった景観を形成していた。	・建物が大部分を占めるが戦後植栽されたガジュマル、アコウ、デイゴ、ナンキンハゼが見られる。	・斜路を被う樹木は、石畳とともに修景の雰囲気を高めている。	B
瑞泉門周辺	・人為的なソテツの株植え	・センダンキササゲ、ガジュマル、デイゴ等がよく繁っている。	・重要なアプローチ景観として、植栽による効果的な演出が必要とされる。	A
首里森御嶽	・年数を経た石灰岩植生の御嶽森	・ガジュマル等の植栽木が見られる。	・御嶽の森である。	A
西のアザナ周辺	・石灰岩植生の自然林	・平地にはワシントンヤシ、カナリーヤシ等の植栽木が僅かに見られる。斜面地には、ガジュマル等が見られる。	・木曳門からのアプローチと、西のアザナへ至る動線を配慮し、京の内へ連続する樹林地形成が必要とされる。	B
京 の 内	・石灰岩植生の極相林的植生 ・階層構造を示す御嶽森 ・クロツグやユウコクラン等の植生	・表土がほとんどなく草地在大部分を占める。僅かに岩上にクワ科植物が見られる。	・城内で最も緑豊かな琉球石灰岩植生を代表する御嶽林である。	A
書 院 南	・城内で唯一の庭園 ・露出した石灰岩を石庭風を利用 ・枝ぶりのよい松やソテツ、低木類を植栽	・表土がほとんどなく草地在大部分を占める。	・城内で最も庭園的技法が凝らされている。	A
南 外 郭	・石灰岩植生の自然林	・一部にデイゴ等の植栽木が見られるが大部分はススキ、ギンネム群落である。	・首里城をとり巻く緑の一つで、風致景観を高めている。	B

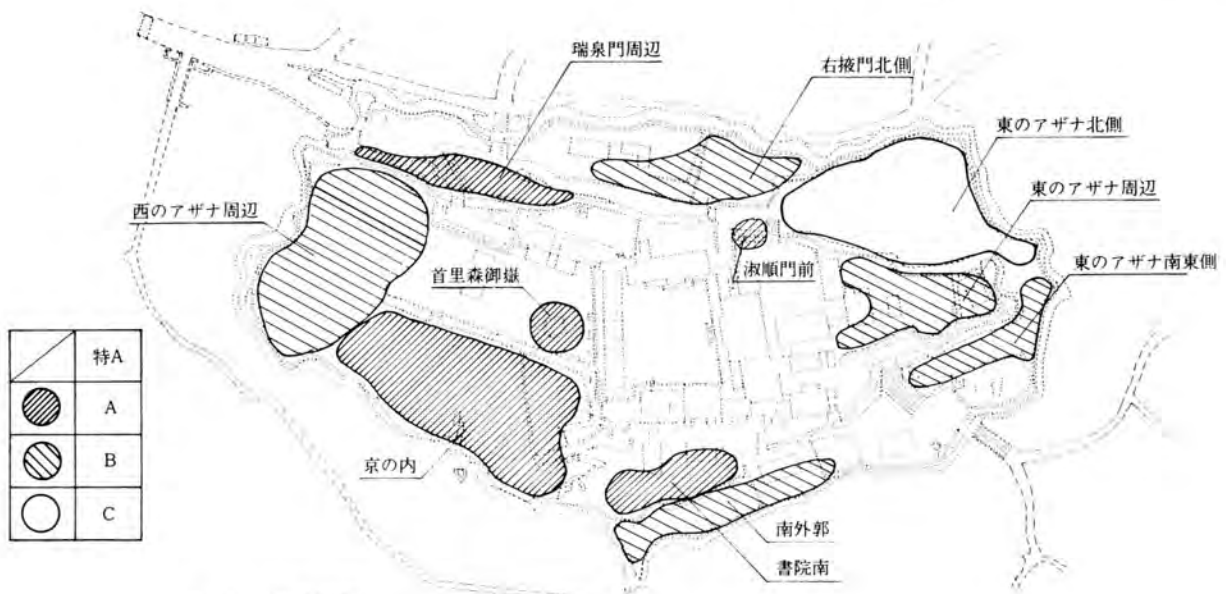


図-1 植生区域図

2) 景観分析

歴史的風致構成要素の把握と現地調査を踏まえて、風致回復後の景観を想定して、(1)遠望景観、(2)アプローチ景観、(3)眺望景観について分析し、条件整理を行った。

(1)遠望景観

戦前の写真、現地踏査、歴史的風致の回復後の首里城を想定し、首里城外から遠望できるポイントを6カ所抽出し、各観点から検討を加えた。遠望ポイント6カ所は図-1に示した。

	位置	摘要	
A	県道40号線世持橋	県道40号線の旧世持橋からは、龍潭の水面や緑を通して首里城一帯を望むことができる。かつては首里城第一の景観ともいわれ、正殿や北殿が豊かな緑や連なる城郭の上にそびえ立っていた。現在でも龍潭の風景に往時の面影が伺われるが、城郭や正殿等の整備により回復される首里城のたたずまいは最も美しい遠望景観である。	特A
B	首里城西側 (2ヶ所)	シマシビラ入口や守礼門前駐車場から首里城の正面入口周辺を望むことができる。歓会門、西のアザナ、京ノ内の内郭など連続した大手城郭が展開する。	A
C	芸大グラウンド入口	県道40号線から芸大のグラウンドへ入ると東西に長く連なる北城郭や東のアザナ、正殿、北殿等が一体となって望むことができる。この景観はグラウンドの整備によって展望が開けたもので、城郭の規模を把握できる。	A
D	県道49号線芸大入口	円覚寺の右掖門及び芸大入り口周辺から北城郭を望むことができ、芸大グラウンドに比べて首里城を間近に捉えることができる。しかしこの遠望景観を望める地点は一部に限られている。	B
E	赤田、崎山町側 (2ヶ所)	町の中の道筋から時折継世門や美福門及びそれに連なる城郭を見ることができ、継世門に近づくにつれて城郭の規模の大きさに圧倒されるが、この見え方は首里城に向かう道筋に限られる。	B
F	崎山公園付近	クダグスク周辺の高さ十数mの断崖の上に築かれた内郭や斜面中腹に連なる外郭を望めるが、城郭内の建造物群は遠望できない。	B

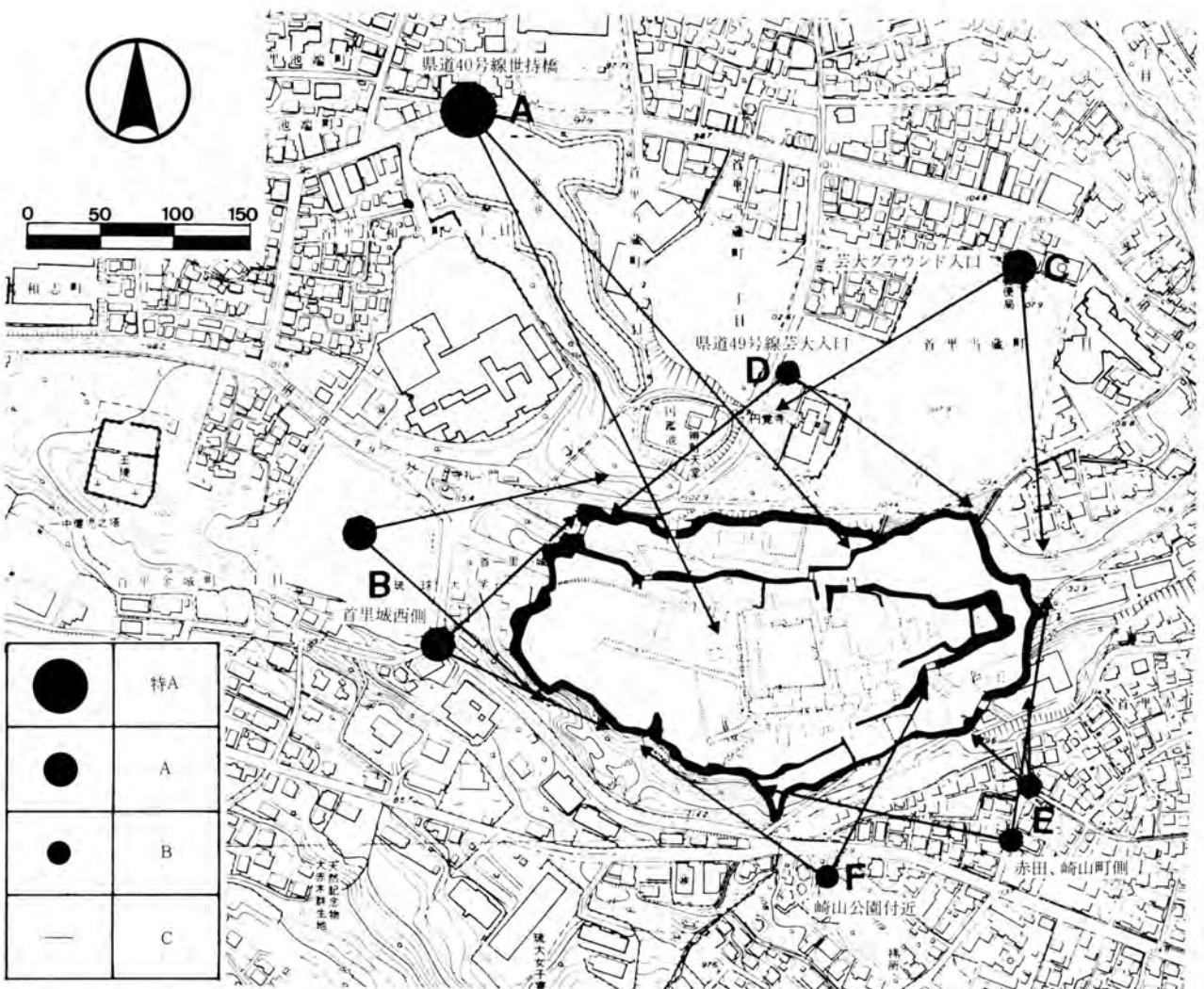


図-1 遠望景観位置図

(2)アプローチ景観

城内へのアプローチは、歓会門から城内中心部へのアプローチが最も優れた景観を呈していた。歓会門ア

プローチ景観について、歴史的風致の構成要素を把握した上で、公園整備のあり方を検討整理した。

区 域	摘 要	
A 歓 会 門 前 周 辺	首里城の都大路である綾門大道を上り詰ると第2の坊門守礼門があり、その奥100mの所に城郭が突出した形で歓会門がある。門の両脇には魔除けとして石獅子が2基置かれている。優美な守礼門に比べこの門は王城の正面にあって簡素でありながら風格を備えた景観である。	A
B 瑞 泉 門 前 周 辺	歓会門をくぐると城内に入ったという雰囲気が高まり、正面に高さ10m余の内郭、更に北殿や漏刻門のいらかが浮き上がって見える。石畳を30m程進むと右手方向に緩やかな磴道が始まり、その先に瑞泉門と両脇の石獅子、ソテツの株植え、石碑、清れつな水の湧き出る龍樋など瑞泉門周辺の景観は、その巧みな構造と各要素の美しい組み合わせによって、城内で最も端麗な景観である。	特A
C 漏 刻 門 前 周 辺	瑞泉門をくぐると高さが5-6m程の城壁に囲まれた閉鎖空間に入り、左手にそびえ立つ漏刻門が次の空間へ移動を促す。瑞泉門に比べて頑強そうな造りの漏刻門とその磴道は城郭の力強さを感じさせる景観である。	A
D 下 之 御 庭 周 辺 (2ヶ所)	漏刻門をくぐると正面に北殿が見えるが、順路は右手広福門へ導かれ下之御庭へ入る。その正面奥に首里森御嶽と石積みに囲まれた京の内の森が見え、緊張感の高まる厳かな雰囲気空間である。広福門からの道は左手に折れ奉神門へと通じる。	A
E 奉 神 門 前 周 辺	長さ50mにわたる奉神門は下之御庭と御庭を別空間として隔絶する建造物でその中央には3つの入り口があり、高さ1m余の階段を上って門へと通じる。中央の門からは正殿の唐破風が目に入り、城の中心に到着するという期待感が強まる。	A
F 御 庭 ・ 正 殿 周 辺	奉神門の階段を昇り門をくぐると正殿の姿が浮かび上がり、城の中心に到達したという臨場感を抱く。真白なサンゴ砂の敷かれた御庭には正殿に向かってのびる磚瓦の浮道があり、王道としての尊厳さを持っている。正殿の左手に北殿、右手に南殿・番所が御庭を取り囲んで独特な建築的広場を生み出している。	特A

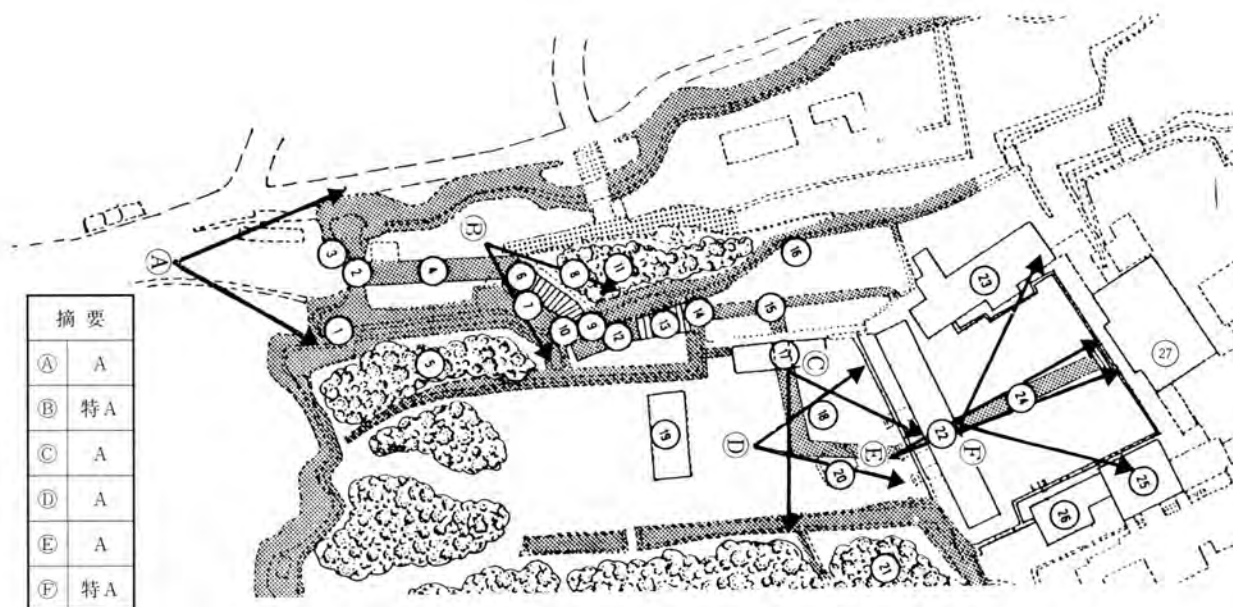


図-1 アプローチ景観位置図

景 観 要 素	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
		城壁	歓会門	石獅子	石畳	自然林	磴道	龍樋	冊封使の石碑	瑞泉門	石獅子	景観木(ソテツ等)植栽地	石畳	磴道	漏刻門	石畳	日影台	広福門	下之御庭	系図座・用物座	首里森御嶽	京の内御嶽林	奉神門	北殿	御庭と浮道	南殿	番所

(3)眺望景観

首里城の西のアザナからは封舟（^{ほうしゅう}冊封使の乗った船）などの入港状況が眺望できると言われており、城内には周辺を眺望できるポイントが数カ所点在してい

た。これらのポイントを現地踏査、断面図によって判断を行い、その中でも良好な8カ所の眺望ポイントを抽出して、各観点から検討整理した。

位置	摘要	
西のアザナ	標高約130mの城郭の西端に那覇の町や港の様子を窺うために造られたもので、北に末吉の森、南に識名の台地一帯を望むことができたが、アザナ周辺の樹林によって城内の建物、城外の建物や城外の玉陵は見えなかった。城外を眺望する地点としてはこの西のアザナが最も優れており、またアザナ周辺の整備によって正殿を始めとした城内の建造物群や城郭の様相を眺望することができる。	特A
東のアザナ	標高約140mの城郭の東端に末吉、弁ヶ岳、識名台地、南部地域一帯を窺うために築かれたもので、ここから正殿の裏側や黄金御殿、二階殿等を縁を通して望むことができた。現在は東アザナ東方に市街化が進んで、眺望が阻害されている箇所もあるが、360度にかけている。	A
京ノ内物見	標高約140mの京ノ内城郭内に城外南方を望むために築かれたものであるが、京ノ内の中にあるため他のアザナに比べて監視の機能は低かった。城郭と一体となった物見の構造は特徴があり、標高が高いため京ノ内の整備の仕方によっては正殿を始めとした城内結構部を望むことができる。	A
二階殿物見	標高約133mの二階殿内部の南に、三箇の町並みや識名方面を望むために築かれたもので、京ノ内物見に比べて標高も低く物見の構造もやや規模が小さい。	A
歓会門城壁	標高約116mの歓会門城壁部に築かれたもので、龍潭や円鑑池、ハンタン山、守礼門を眺望できる。また、瑞泉門周辺やその背後の各門や城壁、正殿、北殿、南殿等首里城大手の風格ある景観を間近に仰ぎ見ることができると言える地点である。	B
漏刻門城壁	標高約127mの漏刻門城壁部に築かれたもので、歓会門に比べて標高も高く城外への眺望がより開け、正殿等間近に眺望できる。	B
美福門城壁	標高約130mの美福門城壁部に南方を望むため築かれたもので、二階殿物見同様の眺望が開けていた。城内は御内原や正殿裏側を望むことができるが、東のアザナに比べて見える範囲が狭い。	B
正殿二階	標高約131mの正殿二階からは御庭を取り囲む北殿、奉神門、南殿等の建築群を望むことができたが、城外への眺望は城郭等によって閉ざされていた。	B

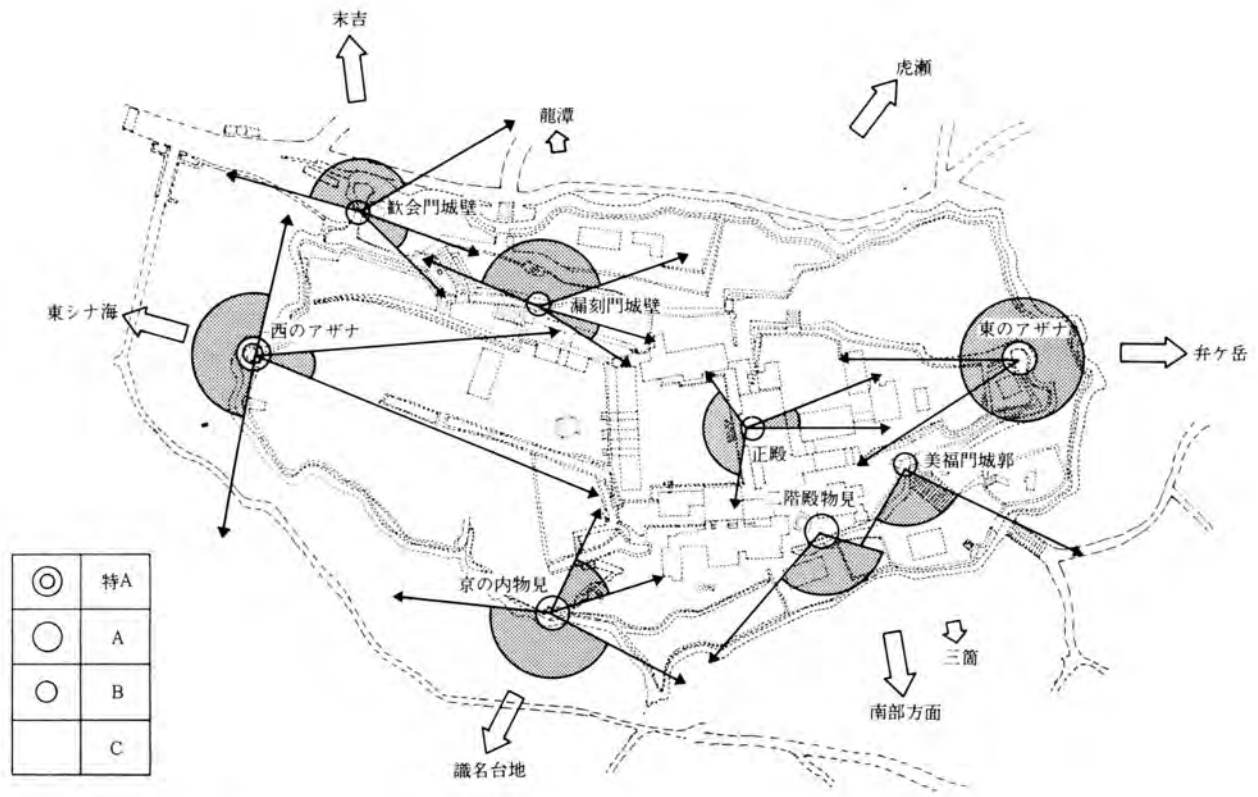


図-1 眺望景観位置図

2. 土地利用の整理

王朝時代の土地利用は古地図、絵図、文献・資料などから、アプローチ利用地、施設利用地、御庭、下之御庭、樹林地、御嶽・聖域的用地、園地的用地、そして、城の東と西にあるアザナの8つに区分できる。こ

れらの利用区分によって城内をエリア分けし、その主要な構成要素、王朝時代の土地利用の特徴、公園利用上の方策などを検討整理した。

区分	歴史的風致構成要素	利用状況	摘要	
A-1	歓会門・石獅子1対・浮道 瑞泉門・礎道・石獅子1対・石碑7基 龍樋・内郭石積み、外郭石積み 右掖門・ソテツ等植栽地	・城内にアプローチする最初の空間 ・歓会門と右掖門間の長い石畳斜路 ・瑞泉門礎道周辺の素晴らしい景観 ・歓会門は公用門	・首里城の大手入口として利用動線が最も集中する。 ・大手城門動線として優れた歴史的風致が展開する。 ・歓会門城壁からの眺望景観が必要とされる。 ・城外から城壁を遠望できる。 ・史実に即して景観構成要素の整備が重要である。	特A
A-2	瑞泉門・石畳・漏刻門・礎道 内郭石積み	・漏刻門構内に夜間や雨天時に時刻を計る器具 ・内部と外部の中間レベルにあり、高い城壁により小さな閉鎖空間を形成 ・瑞泉門は公用門で女官の通行は禁じられており、全ての人が漏刻門前で下乗した。	・大手城門動線として優れた歴史的風致が展開し、その構成要素の整備が必要とされる。	A
A-3	漏刻門、広福門・石畳・日影台 内部石積み	・日影台は太陽を利用した時刻を計る器具 ・広福門と北殿北側への動線の分岐点		A
A-4	久慶門・礎道・石畳・寒水川樋川 右掖門・石畳、淑順門・階段 内郭石積み	・久慶門・右掖門は女官などの通用門 ・寒水川樋川や龍樋からの給水溝や排水溝が久慶門の外まで延びている。 ・門と城壁による閉鎖的空間 ・淑順門は御内原への専用門	・城内への動線として独特の雰囲気をもっている。 ・歴史的風致の再生重要	A
A-5	継世門・礎道・石碑2基 美福門・石獅子1対・石畳 内郭石積み、外郭石積み、御嶽林	・継世門は御内原や料理座・大台所への通用門 ・美福門は第一尚王統時代は第一の城門で御内原への専用門	・首里城東南からの利用動線にあたり、歴史的風致が優れている。	B
A-6	美福門、右掖門、美物板門 内郭石積み	・美福門より入り東のアザナ、御内原、二階殿等への動線の分岐点 ・男性の門番と女性の門番	・城内の主動線となっている。	B
B-1	内郭石積み、支壁 銭蔵、係員詰所、厩	・銭蔵は倉庫 ・係員詰所は城内汚物等を処理する係員の詰所 ・厩は王府御用の馬の畜舎	・散策・休憩等の園地利用、便所等の施設設置に対応する。 ・城外から城郭を遠望できる。	C
B-2	内郭石積み、石積み	・土地利用不明	・北殿と一体となって御庭を囲む石垣等の整備が必要とされる。	C
B-3	世誇殿、世添殿、女官居室、寄満、金蔵(便所)(井戸)、内郭石積み、支壁	・御内原と呼ばれる王女、女官等の生活の場 ・男子禁制の場所	・散策、眺望、休憩、学習等の多目的な広場利用に対応する。 ・往時の資料が少ないため、今後の研究が必要とされる。	B
B-4	料理座、大台所、石畳 内郭石積み、外郭石積み	・継世門とE-5を結ぶ長い石畳 ・厨房、倉庫等の機能	・園路沿いの小広場、管理用のサービスヤード等に適している。	C
B-5	佐敷殿、内郭石積み、支壁、石畳	・佐敷殿の園地		C
C-1	正殿、南殿、番所、北殿、奉神門、御庭、磚瓦浮道、黄金御殿、廊下	・冊封式典、正月・冬至の式典など城内の重要な儀式空間	・首里城の拠点エリアで、伝統芸能等の発表なイベント空間として重要である。	特A
D-1	広福門、奉神門、系図座 首里森御嶽、京ノ内石積み	・神女による首里森御嶽への祈願など神聖な儀式空間 ・冊封式典の冊封使随員の控え所	・首里森御嶽の整備が望まれる。 ・売店、便所、休憩舎等案内サービス機能が必要とされる。	A
E-1	木曳門、内郭石積み、斜面樹林地	・歓会門の支壁 ・景観形成林、水源灌養林	・城外からの遠望を考慮した植栽が必要とされる ・木曳門は身障者、管理用車輛の道入路となる。	B
E-2	内郭石積み、支壁	・内郭の内側にあつて、ほぼ平坦 ・景観形成林、水源涵養林	・西のアザナへの園路整備が必要とされる。 ・城内外の景観を考慮した緑陰広場の整備が望まれる。	B

区分	歴史的風致構成要素	利用状況	摘要	
E-3	外郭石積、支壁、樹林地	・急傾斜地 ・景観形成林、水源涵養林	・樹林と一体となった城郭整備が必要とされる。	C
E-4	内郭石積み、外郭石積み、樹林地、支壁	・ほぼ平坦 ・景観形成林、水源涵養林	・城郭を巡る散策ルートに適している。	C
E-5	内郭石積み、外郭石積み、樹林地、支壁	・斜面地 ・景観形成林、水源涵養林	・城外への眺望を考慮した林間広場に適している。	C
F-1	内郭石積み、支壁、真玉森御嶽、首里森御嶽等の5つの御嶽、物見	・城内で最も神聖な宗教的儀式空間 ・露出した隆起石灰岩が多く、中のアザナは展望地点	・十分な調査研究をふまえて、首里城発祥の地に相応しい聖域としての整備が必要とされる。	A
F-2	内郭石積、石積、アカタ御テウノ御嶽	・急斜面地の樹林地	・斜面地整備と御嶽林の整備が必要とされる。	B
F-3	内郭石積、白銀門、寝廟殿、石畳石敷広場、拝所	・寝廟殿は国王の位牌を奉祀し国王薨去の際は靈柩を安置する場所 ・樹林地・御嶽林の雰囲気樹林地	・城壁や白銀門、植栽が一体となって歴史的風致を構成している。	A
F-4	内郭石積、二階殿等、苺銘御嶽、石造階段	・料理座と内郭内の施設を結ぶ動線 ・苺銘御嶽	・苺銘御嶽の聖地的雰囲気を必要とされる。 ・管理車両動線の確保が必要とされる。	A
G-1	内郭城壁、支壁	・ソテツの株植え	・瑞泉門等と一体となった歴史的風致を構成している。	A
G-2	書院、鎖之間、庭園、内郭城壁	・書院、鎖之間が庭園と一体 ・庭園にソテツや枝ぶりの良い松が植栽	・城内唯一の琉球庭園として整備が必要とされる。	B
G-3	二階殿、物見台、内郭城壁	・野外に盆栽を置く台があったと言われる ・物見台からは三箇の町や南部地域の眺望が可能	・物見台は眺望地点として必要とされる。	B
H-1	東ノアザナ、物見櫓、時報報知旗、鐘	・首里城東域の監視所 ・漏刻門の太鼓を受け城内外に鐘と旗により時刻を報知 ・北方や弁ヶ岳、三箇、南部地域の眺望が開けている ・城外から特徴ある城壁景観を望める	・城外から遠望され、また城内外を眺望する地点として重要である。	A
H-2	西ノアザナ、物見櫓、時報報知旗、鐘	・首里城西域の監視所 ・東ノアザナと同様旗と鐘により時刻を報知 ・那覇港に入港する船の監視 ・北方や那覇の町が見渡せる	・城外大手からの遠望景観が優れている。 ・城内外を眺望できる地点として最も重要である。	A

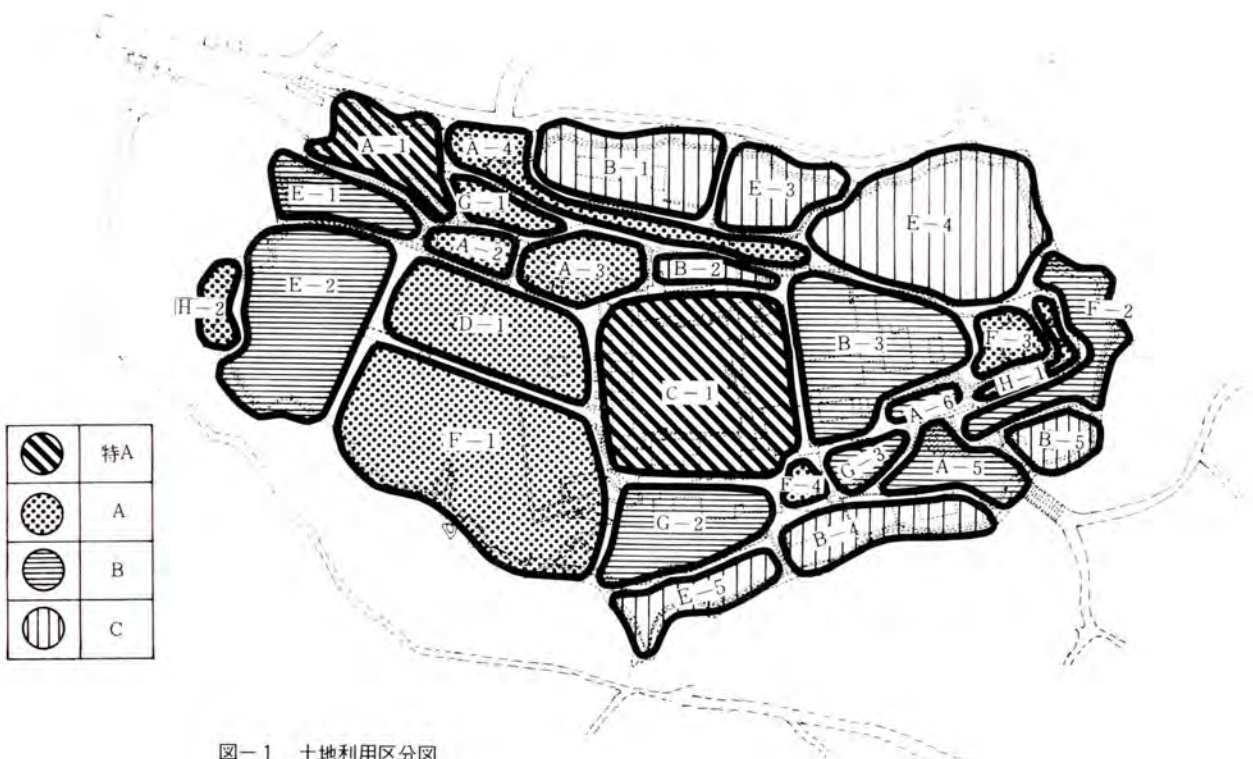


図-1 土地利用区分図

3. 施設の整理

首里城の重要な機能を果たしていた建物や広場については「建築物・広場」(60ページ)の項で詳細な検討、整理を行った。

「施設の整理」では、摘要欄でB以上に区分された

各施設について、公園施設としての可能性等について検討を加えた。なお、Cランクに区分された各施設は、様式や規模が不明で詳細が把握できず、利用の観点からここでは除外した。

名称	様式	規模 (内は延床面積)	建物用途	利用方策	摘要	
正殿	外観重層、内部3層入母屋造り本瓦葺き	約517㎡ (約1,200㎡)	・国王が政務をとったり、城内の最も重要な儀式に使用された。	・国殿に相応しい内部装飾を施し、国王や国政に関わる資料等の展示に供される。	特A	
北殿	平屋建て入母屋造り本瓦葺き	約462㎡	・冊封使接待のための建物で、日頃は評定所として使用された。(議政殿ともいわれている。)	・音楽・演劇・舞踊等の伝統芸能をはじめ各種イベントに対応できる。	A	
南殿	二階建て入母屋造り本瓦葺き	約237.6㎡ (476㎡)	・薩摩の役人を歓待し、日本式の行事が行われた。	・これらの建築群は廊下によって連結されているので往時の建物用途にかなった一体的利用が可能である。黄金御殿と二階殿は王家の生活にかかわること、又南殿その他の建物は王朝の歴史・文化等にかかわる展示機能を行える有効的な施設である。	A	
番所	平屋建て入母屋造り本瓦葺き	約260㎡	・取り次ぎ役所として機能していた。		A	
書院・鎖之間	平屋建て入母屋造り	約410㎡	・書院は国王の執務室、鎖之間は王子衆の詰所であり、南側に築庭園があった。		B	
二階殿	二階建て本瓦葺き	約260㎡	・国王専用の座敷であり、北面は2階、南面は1階になっていた。		B	
黄金御殿	二階建て本瓦葺き	約340㎡ (約680㎡)	・国王や王妃の寝居等があった。		C	
近習詰所	二階建て本瓦葺き	約80㎡ (160㎡)	・国王側近の近習の詰所であり、御内原への取り次ぎ室(鈴の間)があった。		C	
納殿、君誇(奉神門)	平屋建て本瓦葺き一部二階建て	約240㎡	・納殿は御内原の用を務める所であり、君誇は神女達が神をもてなす御殿であった。		・城内主要施設の入口としての機能、又休憩施設にも利用できる。	A
系図座・用物座	平屋建て本瓦葺き	約160㎡	・系図座は戸籍を登録し家譜編集を行う所であり、用物座は先島の反布や久米島紬等の賣入を掌る所であった。			C
大与座・寺社座(広福門)	平屋建て入母屋造り本瓦葺き	約100㎡	・大与座は民事関係を取り扱った所であり、寺社座は寺院や神社、宗廟祭典を司った。			C

※建物規模は配置図等から算出しており、厳密な数値ではない。

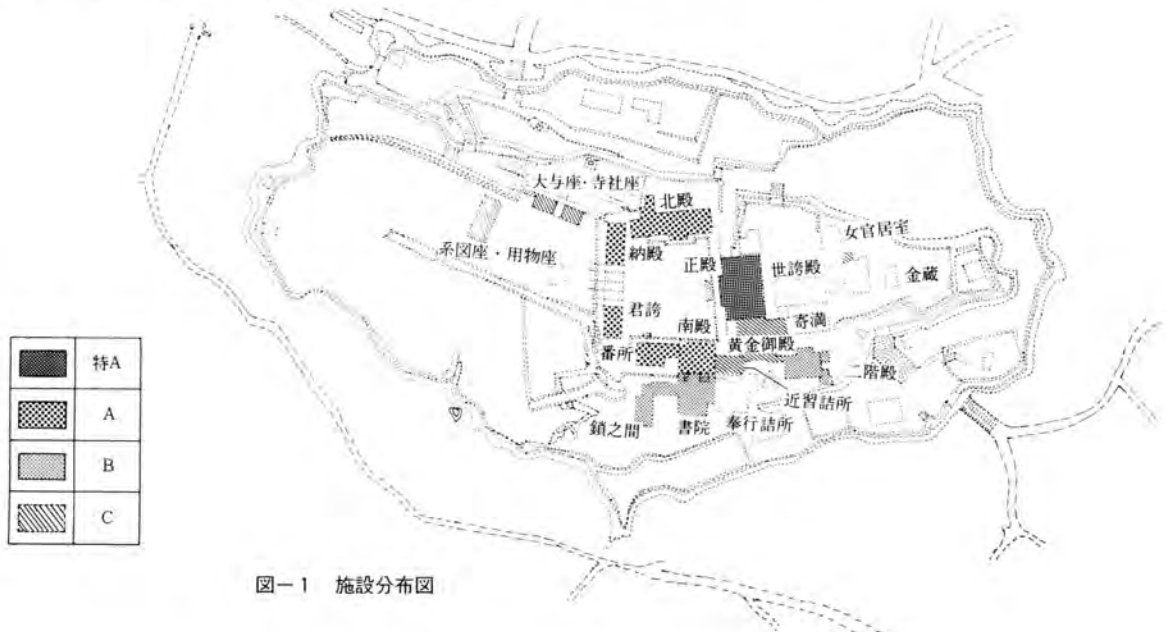


図-1 施設分布図